

博士論文最終結果報告書

看護学研究科	学籍番号 氏 名	1 8 6 1 0 1 浅井 直美
論文題目 「病院の勤務経験を有する新人訪問看護師の職業的アイデンティティのゆらぎ自己評価尺度」の開発		

審査委員

区 分	職 名	氏 名
委員長	教授	松田 安弘
委員	教授	行田 智子
委員	教授	高井 ゆかり

論文の要旨

本研究は、「病院の勤務経験を有する新人訪問看護師の職業的アイデンティティのゆらぎ自己評価尺度」を開発することを目的とした研究である。

グローブらの尺度開発のプロセスと先行研究の検討結果に基づき上記の尺度を開発した。尺度の構成概念は、看護師の職業的アイデンティティを確立するプロセスの構造モデルとアイデンティティのラセン式発達モデルを適用し演繹的に構築した。また、この構成概念に基づく文献検討によりアイテムプールを作成し、120質問項目5段階リカート型尺度から成る尺度案を作成した。さらに、専門家会議、パイロットスタディを経て120質問項目のうち55質問項目を選定した。

尺度の信頼性・妥当性を検証するための1次調査は、全国の訪問看護事業所5,000か所に勤務する病院勤務経験3年以上、就業後2年未満の看護師を対象に、10,000部の質問紙を郵送した。また、再テスト法のための2次調査は、1,000事業所に勤務する上記と同様の条件にある看護師を対象に、2,000部の質問紙を配布した。

質問紙の回収数は1,227部、有効回答数は917部であった。917部を分析対象とし、項目分析後、探索的因子分析による尺度の再構成を行った。また、クロンバック α 信頼性係数、再テスト法による尺度得点の級内相関係数の算出により尺度の信頼性を検討、探索的因子分析後の因子の解釈、確認的因子分析、弁別妥当性として看護師の職業的アイデンティティ尺度得点との相関係数の算出、既知グループ法により妥当性を検討した。

項目分析により16質問項目、探索的因子分析により16質問項目を除外し、4下位尺度23質問項目とした。尺度の信頼性を検討した結果、クロンバック α 信頼性係数は全体0.903、下位尺度0.809～0.872、再テスト法の尺度得点の級内相関係数は全体0.755、下位尺度0.566～0.792であった。また、尺度の妥当性を検討した結果、探索的因子分析後の因子を、【自己の訪問看護実践に対する自信のなさ】【訪問看護実践の優先度に対する葛藤】【過去の経験とは異なる訪問看護実践に対するとまどい】【訪問看護実践への教育的支援に対する困惑】と命名した。4下位尺度23質問項目の確認的因子分析による適合度の指標は、GFI=0.922、AGFI=0.903、CFI=0.928、RMSEA=0.056であった。既知グループ法による分析結果は、訪問看護

師としての違和感がある群は、ない群に比べて尺度・下位尺度の平均得点が有意に高いことを示した。看護師の職業的アイデンティティ尺度の総得点・下位尺度得点との関係は、尺度全体と第1因子にかなりの負の相関、第2から第4因子にやや負の相関を示した。

以上より、4因子23質問項目から構成された本尺度は、尺度開発に必要な検討がなされ、一定の信頼性・妥当性が確保されていることを示唆した。

本研究による開発された尺度は、看護協会主催の新人訪問看護師養成講習会や所属施設の看護管理者との面接時等に、対象である新人訪問看護師に紹介し、自己評価を推奨するような方法により活用できる。

論文審査の結果の要旨

令和4年7月5日、審査員全員出席のもと、提出された博士論文に関する口述試問を実施した。その結果、博士論文の内容及び質疑に対する応答から、個別審査の基準を満たしていると判断した。

主に、審査基準1)看護学研究として意義があるか、3)新たな知見を提示しているか、6)研究目的に適った研究デザイン・研究方法を用いているか、11)研究結果とその解釈を区別して論述しているかの4項目に関連する以下の点について口頭試問を行った。

- ① 本尺度に関連する重要な概念「看護師の職業的アイデンティティの確立」「アイデンティティのゆらぎ」「危機期」「危機」の意味とその関係を示しながら本尺度の測定対象となる構成概念を説明する。
- ② 「看護師の職業的アイデンティティを確立するプロセスの6段階の定義」を単に否定形に置き換えて本尺度の下位概念を定義していないことの根拠を説明する。
- ③ 本尺度を開発する意義を説明する。
- ④ 結果をふまえ、本尺度の活用可能性を説明する。

上記③については、適切な内容の回答があった。しかし、①②④については、本尺度の構成概念を説明する表現のゆれや論理に飛躍があり、明瞭かつ十分に説明できなかった。そのため、本尺度の測定対象である構成概念、尺度の下位概念を論理的に説明する論述、発表とすることが課題として残ることを学生と共に確認した。また、主語と述語の関係がわかりにくい文章や誤字・脱字が複数あり、再度、論述全体を確認する必要があることを伝えた。

看護学研究科全教授が参加する最終審査（令和4年8月3日実施）において、審査受審学生は、論文審査の結果を受け、尺度の構成概念の構築に至ったプロセスや構成概念に関連する重要な概念の意味とその関係、下位尺度の定義を発表画面と口述により説明した。また、論文の意義や内容を時間内に簡潔、的確に発表した。

質疑応答では、尺度の活用可能性について、看護協会主催の研修や看護管理者との面接時の活用例を示しながら具体的に説明した。また、下位尺度が「新人訪問看護師の職業的アイデンティティのゆらぎ」、すなわち、「自己と訪問看護師の一体感が得られない意識」を表していると言える理由について、尺度の構成概念の明確化のプロセスを示しながら説明した。

さらに、先行研究の結果に基づき、尺度得点と対象者の介護経験の有無等が関係する可能性があり、今後の課題としている研究によりそれが明らかになることを説明した。准看護師による尺度の使用については、本研究が看護師の自己評価に活用可能な尺度を開発しているため、准看護師を使用者として想定していないことを説明した。加えて、調査の対象者数を把握できなかった理由を説明するとともに、実質の回収率に基づく尺度の妥当性の検討を考慮したデータ収集の必要性を確認した。このことにより、本学博士後期課程のディプロマポ

リシーである「DP4 看護学を専攻する看護専門職として必要な高い倫理的思考力をもち、真理を探究し続ける。」と「DP5 革新され続ける看護学の充実・発展に向けた研究の推進に意義を見出す。」を満たしていると判断した。

以上の結果を踏まえ、最終審査同日に行われた看護学研究科教授会において本論文が本学博士論文の基準を満たしている旨、全会一致で可決された。